

2003 年度 3 月 卒 業 論 文

主 査 浦 野 正 樹 先 生

# 生を条件づける都市空間

総頁数 33 頁

第二文学部 文学・言語系専修 学籍番号 1D9930025

赤 尾 武 洋

# 目次

はじめに .....	3
第一章 現代の東京の都市空間.....	4
(1) バブル後の都市再開発	
(2) 再開発空間と「明るさ」	
(3) グラフィティと破壊	
(4) 半-言語的、半-記名的？	
(5) 都市計画と忘却	
(6) 建築物の消費化	
第二章 空間-場所-人間 .....	13
(1) 現象学的地理学	
(2) 空間と場所の関係性	
(3) 建築物や構築物が人間に与える影響	
(4) 抽象的思考による都市計画の問題性	
(5) 没場所性と根付くことの権利	
第三章 公共性と都市空間 .....	17
(1) アレント『人間の条件』の視点から	
(2) 場所の力	
第四章 都市工学と監視社会.....	20
(1) 監視技術の進展	
(2) 防犯空間	
(3) リスク回避と言論の消失	
第五章 生を条件づける都市空間.....	23
(1) アレント - 現象学的地理学 - 都市工学と監視社会	
(2) 消費的空間の問題	
(3) グラフィティの意味	
(4) 影への志向	
(5) 他者性の恐怖と都市の魅力	
おわりに .....	29
付図、註、参考文献	

## はじめに

人間は空間の中で生を営む。空間は生きる人間の身体の周りをつねに取り巻き、その意識や行動の様態を規定し、条件づけるものである。その意味で空間を問うことは我々の生を問うことである。このような立場から、現代に生きる私たちに密接に関わり、私たちを取り巻き、条件付けている「都市空間」を問うていくこと、これが本論文の基本的なラインである。

もう少し細かく説明を加えれば以下ようになる。人間は、周囲の空間の様態を視覚的に、身体的に認知する存在であるから、人間をとりまく空間の様態は、人間の意識や行動に変化を与える。「私たちを取り巻く空間」という抽象的なものを、都市においてできるだけ具体的にとらえるならば、それは、私たちを物理的にとりまく建築物、都市構造などの、都市計画や都市工学と密接な関わりを持つ技術であるといえるだろう。我々は建築物や都市構造などの物理的な空間性の中においてのみ、はじめて都市的生活を送ることができる。その意味で我々の生は都市空間の様態に条件づけられている存在なのだ。

そのような立場から第一に問題としてとらえることができるのは、都市空間の変化が人々の意識や行動へ影響をもたらすとすれば、その両者の間にはどのような関係性があるのかということ、ということ。第二に、もしそのような影響関係が仮定されるとしたならば、空間性のどのような変化が、どのような形で人々に実際の影響を及ぼしているのか、という実際的な影響関係についての検討ということである。

さて、この論文では、はじめに現代の日本の大都市の状況について、とりわけ様々な現象の集積する、首都東京に着目し、近年目につくいくつかの特徴を取り上げてみたい。

その上で、空間・場所と人間の関係性をめぐって、(1)現象学的地理学、(2)公共性(ハンナ・アレント)(3)監視社会と都市工学、の三つの視点から考察を加えていきたい。

(1)においては、人間が空間の様態によっていかなる影響を受けるのか、その関係性を探った上で、空間と場所の関係性、人間にとって場所というものがどのような意味をもつのかを探る。(2)では、ハンナ・アレントの『人間の条件』を参照しながら、都市空間という公共圏(公的領域)における人々の活動の様態と、それを条件付ける都市の構築物(建築物)のあり方を探っていく。(3)では、デイヴィット・ライアンの『監視社会』と、都市工学の文献にあたりながら、近年の建築物の構造と監視化の流れの関係性について考察していく。

## 第一章 現代の東京の都市空間

### (1) バブル後の都市再開発

駅の改札階から平面で接続されたタイル張りのペDESTリアンデッキをわたっていくと、超高層のツインタワーが目に入る。ペDESTリアンデッキの終端部には長く並列に配置されたエスカレーターが接続されていて、それに乗り換え下っていくと、噴水や花壇の置かれた吹き抜けの空間が待ちかまえている。その空間から伸びた明るく直線的な、見通しのよい通路に目をやると、そこにはまぶしいほどの照明に照らし出された透明感のあるショップが、整然と並んでいる。六本木ヒルズ、渋谷マークシティ、品川インターシティ、汐留シオサイト等々、近年東京で竣工された大規模な再開発地域に足を踏み入れたとき、多少の差はあれ、人々はこのような空間経験をしているだろう。

これらの再開発地域は大抵の場合、オフィス、高層住宅、ショッピングモールの三つの要素により構成されており、都市において他地域とは一線を画す特徴的な区域として、人々に非日常的な空間経験をもたらす。1990年、バブル経済の崩壊が起こった後も、バブル前、あるいはバブルのただ中に計画あるいは事業開始されたいくつもの大規模再開発事業が、東京の各所に姿を現している。

代表的なものをあげただけでも、天王州アイル(1992年竣工)恵比寿ガーデンプレイス(1994年)、品川インターシティ(1998年)、ゲートシティ大崎(1999年)、渋谷マークシティ(2000年)、汐留シオサイト(2002年一部竣工)、品川シーサイドフォレスト(2002年一部竣工)、品川グランドcommons(2003年一部竣工)、六本木ヒルズ(2003年)などがあげられる。その他開発中・計画中のものも含めれば、東京駅周辺、秋葉原、西新宿など、多数の超高層再開発計画が進行している。

2002年6月の「都市再生特別措置法」発効以降、閣議決定により発足した都市再生本部が定めた「都市再生特別地区」では、用途地域、容積率、高度制限などの規制が適用除外されることとなった(五十嵐・小川, 2003, pp.77-82)が、この法的措置は都心部での再開発事業を促進させた。

そもそもこの「都市再生特別措置法」は、2001年4月6日の緊急経済対策閣僚会議資料「緊急経済対策」に、わずか50行の箇条書きの記述で(矢作, 2002, p.4)記された「都市再生、土地の流動化」という基本方針が基となったものであった。都市再生本部の会合資料を読むと、この都市再生の意義を伺い知ることができる。

我が国の都市は、90年代以降の経済の低迷の中で、特に、中枢機能が集積している東京圏、大阪圏などが国際的にみて地盤沈下している。[...]我が国の都市を、文化と歴史を継承しつつ、豊かで快適な、さらに国際的にみて経済活力にも満ちあふれた都市に再生する。[...]「都市再生」においては、民間に存在する資金やノウハウなどの民間の力を引き出し、それを都市に振り向け、さらに新たな需要を喚起することが決め手となる。(内閣官房都市再生本部事務局,「都市再生に取り組む基本的考え方」,2001.5.18.)

その他「災害対策」、「過密による弊害の緩和」などの記述もあるが、基本的にこの都市再生が経済対策であることがわかる。

大方の指摘によれば、この都市再生政策は「民間企業が、大規模な空地や、自らの持つ種地をもとに周囲の土地を[...]巻き込みながらまとめ、収益性の高い、高密度な開発を実現することを、促進することにある」(大方, 2002, p.28)という。細分化された土地をまとめ、ひとつの大きな再開発地区を設定しようとしても、従来の都市計画法の制度枠組みでは、地元の零細な地権者の合意がなかなか得られず、容積率規制

などが残り、高収益をもたらす高密度開発ができないという民間事業者の不満がある(大方、2002、pp.28-29)というが、それを解消させ民間の資本投下を促進させようというのが、この都市再生の意図する所であるようだ。

## (2) 再開発空間と「明るさ」

これらの再開発地域を歩いて感じることは、それらが一様に明るく、整然としているということだ。十分な幅員の道路に囲まれ、超高層のビルディングが建っている。そのビルディングのまわりには、人工地盤による見通しのよい広場のような空間が配置されている。中層階以上はオフィスや住宅とされているため、通常出入りできるのは下層階のみである。しかも多くの場合その下層階には商業施設(主にショッピングモール)しかないから、それだけ大規模の再開発事業がなされたとしても、我々が出入りできるのはわずかな商業スペースと、その周りの閑散とした立ち止まったり、座り込んだりしにくい通路や広場空間だけである。

超高層化による床面積の増加と、徹底的に消費の空間化をすすめることによって、利潤を獲得していこうとする再開発事業者の意図が、前面に押し出された空間、それが再開発地区の特徴であろう。このような再開発地区は、都市のなかに一種の非日常空間としての華やぎをつくる一方で、我々の空間経験に、違和感や不在感をもたらしもする。ただ流体と化した人と人が、混ざり合わずに通過しあっていく感覚、明るさの影に何らかの隠蔽されたものがあるのではないかという感覚、なによりもその場所に所在していること自体へのリアリティのなさ(不在感)などが、非現実的に構成された再開発地区の中を歩いていると感じられる。

若林と内田は、雑誌対談のなかで、東京湾岸の臨海副都心地区を歩いたときの感覚について、次のようなコメントをしている。

若林「[...] 国際展示場駅からお台場辺りを歩いたときに感じたのは、『一体これは何なのか』という感覚です。この感覚は[...] 風景や空間とそこを歩いている自分とのあいだに感じられるある妙なズレの感覚のようなものと似ています。」(若林・内田, 1997, p.62)

内田「湾岸を歩いていて身体を見舞う奇妙な感覚は、東京全体のとらえどころのない空間感覚に通底しているんじゃないかと思うのです。」(若林・内田, 1997, p.66)

この違和感、不在感は一切何なのだろうか。平井の論文は、この疑問を解く手がかりとなるかもしれない。平井は、1970年代以降の市街地再開発事業について、行政の担当者や住民らが、再開発事業による街の変化について、どのようにコメントしているのかを追うなかで、「明るさ」という言葉に着目している。再開発の事業報告などに度々見られる「街が明るくなった」などのコメントからは、再開発において「明るさ」という言葉が修辞として働き、そこにある種の力が作用しているのではないかと、平井は指摘している。その上で、平井は次のように記している。

言いかえれば再開発の結果たちあがったのは、あたらしい都市や生活のはじまりというよりも、存在していた関係の束の断絶なのだ。[...] 市街地再開発事業において「明るさ」が痛切にはたらいているのは、都市における空間の変容が、過去のひろく共有された記憶によりかかるようなかたちではなく、過去との切断そのものにおおきな意味をあたえるようなかたちで進行しつつある[...] からである。」(平井, 2002, pp.62-63)

再開発事業においてもたらされる「明るさ」が、過去との断絶において成立しているとの指摘は、非常に興味深い。再開発事業用地が以前どのような目的に供せられていたかに着目すると、それらにはある共通点を見いだすことができる。先に列挙した近年の再開発事業用地について見てみれば、まず目立つのが鉄道関係の跡地である。渋谷マークシティでは、地下鉄車庫と駅舎ならびに、私鉄のバス用道路地が、汐留では貨物駅跡地が、品川では車両基地が再開発のための広大な敷地の基となった。秋葉原も貨物駅跡地及び、青果市場跡地、民有地などが基となっている。一方、恵比寿や大崎は工場跡地が基となっている。いずれも工業社会から脱工業化社会への変化の過程のなかで、都心に立地している意味の消失を迫られていった空間である。一方六本木ヒルズなどにおいては、築年数のたった木造密集住宅地と狭隘な道路が主にその基であった。

つまりこのように列挙していったとき、これらの空間がいずれも、ある種の「暗さ」を纏っている空間であったとすることができよう。それは単純にそれらの建築物が、築年数を重ね老朽化しつつあったという事実のみならず、社会的な価値としての「古さ」や、雰囲気としての「暗さ」を持ち、また、そのようなイメージを想起させるような空間であったのではないだろうか。

このように考えたとき、再開発地区の持つ「明るさ」が、単にその物理的・光学的な明るさだけのことでないことが想像される。それは、前に記したような「暗さ」の空間を断絶し、破壊し、一掃した上で成り立つ、あっけらかんとして、しかし、実は非常に不安定な「明るさ」なのだ。

再開発地区は、過去との断絶により影（暗さ）の存在を宙づりにしたまま、影（暗さ）の出現を潔癖的に排除するかのように、その明かりを煌々ともし続けている。そしてその「明るさ」への移行は、再開発地区のみならず、近年盛んに、バリアフリー対策と一体となって行われる駅舎の改良工事や、それに伴って行われている駅舎内店舗の開設（駅構内の消費空間化）においても見ることができる。いわば、改変されるあらゆる公共空間において、「明るさ」への移行は日々着々と行われつつあるのだ。

### （３）グラフィティと破壊

前項で見たような都市の「明るさ」への移行の一方で、「暗さ」への移行を想起させるような現象が増加していることも忘れるわけにはいかない。

それは、公共空間の壁面に多く見受けられるようになった、グラフィティである。グラフィティとはエアゾールスプレーで壁面に描かれたものであり、形を崩したアルファベットのような形状をとることが多い。

1960年代の終わりにニューヨークで始まったとされるグラフィティは、1970年代から80年代にかけてヒップホップ・カルチャーの構成要素の一つとして大きなムーブメントとなっていき、さらに日本を含む世界のあらゆる場所に拡散していった（酒井，2002，p.52）。そして、1990年代後半以降、日本でも多く見かけるようになったこのグラフィティは、「落書き被害」という形で、認知されつつある。「落書き」を含めた器物損壊罪で検挙された件数は、1998年の約4万6000件から、2002年の約19万6000件へと増加しており（警視庁，2002，『平成14年 警察白書』）ただしこれは「落書き」以外の器物損壊罪も含むので「落書き」だけの検挙件数ではない、新聞紙上では「落書き」を扱った連載記事も見受けられる（毎日新聞都内版，神奈川県版，2003年6月～10月）。

「落書き」に対する否定的意見を、いくつか取り上げてみると以下の通りである。

- ・最初はトンネルの中央部分にしかなかった落書きが1年ぐらいいつという間に広がった。（主婦54歳）<sup>(1)</sup>
- ・これだけ汚されて放置している神経は異常です。この落書きが芸術であるなどという暴論は許されません。落書きした人間はそのつもりでも、見る人には何も訴えるものはありません。[...]町の中心に、

美しさを取り戻さねばなりません。<sup>(2)</sup>

・「落書き」と聞いて〔…〕私の頭に最初に浮かんだのは、トンネルの天井や歩道橋の胴体部分など「一体どうやって描いたのだろう」と思うような場所にある落書きで、不思議に思いつつ感心したことがあるなという程度のことだった。〔…〕「ないほうがいいけど、あっても影響はないかな」。しかし、落書きをなくすために奮闘している人たちの熱心な活動〔…〕に触れて、無関心は罪だと感じるようになった。〔…〕落書きを消さず、そのままにしておく落書きがさらに増えていくだけでなく、別の軽犯罪も増加していく傾向があるという。(新聞記者)<sup>(3)</sup>

これらの言葉からは、私有物もしくは公共の建築(構築)物への「落書き」という損壊行為に対する人々の怒りや不快感を読み取ることができる。あるいは落書きによって汚された街を、「きれいな」「美しい」状態に取り戻そうとする人々の考えも読み取れる。「落書き」の実被害にあった建物や壁を所有し、それを修復するのに費用負担を強いられる被害者の怒りは理解にたやすい。しかしそうした、直接的な加害者-被害者の関係性を越えたところでの人々の怒りのようなものも感じられる。そこには、深夜、短時間のうちに描かれ、増殖する「落書き」への気味悪さ、既存の街の外観が無秩序に変化せられたことへの戸惑い、あるいは「落書き」の形状や色彩自体への違和感や不快感も介在しているのであろう。

一方で「落書き」を肯定する意見、実際にグラフィティを描いているグラフィティ・ライターの言葉を取り上げてみよう。

・落書きはカラフルで、カッコいい。全然、気にならないし、もっと描いてほしいぐらい。(14歳女性)<sup>(4)</sup>  
・ファッション誌に紹介されていたのを見て、ずっと興味があって。たまたまその時、勢いのあったクルーと知り合いになって、「始めてみれば」って感じで〔…〕。落書きの楽しみは自己満足と友達の輪。自分の書いた作品がずっと残っているとうれしいし、見た人が連絡をくれたら最高の気分。〔…〕迷惑なのは分かるけど、自分は中毒だから、公共物や他人の敷地に書くのはやめられない。書きたい気持ちの方が上。(日本のあるグラフィティ・ライター)<sup>(5)</sup>

これらの言葉からは、グラフィティが、ある種ファッション的なものとして「格好良さ」のイメージを付与されていることが伺い知れる。またそこには、「自己表現」の欲求もかいま見られる。

しかし、どうにも両者の言葉はすれ違っている。「落書き」を否定する言葉を追うなかで、「落書き」の何がどのようによくないのか、不快なのか、嫌悪感を引き起こすのか、について言及した言葉には、なかなか巡り会うことができない。一方でグラフィティ・ライターの言葉からも、なぜ描きたいのかという欲望の中心は、言語化されぬままの曖昧なものとしてとどまっている。いささか恣意的な引用にはなったが、両者の間にある、言語化できぬまま横たわるこの性質は一体何なのだろう。

・落書きをする者は軽い気持ちでも、被害者は大変な迷惑です。自分の美的感覚を押し付けているのでしょうが、影響はものすごく大きい。(末綱隆・神奈川県警本部長)<sup>(6)</sup>  
・雑然とした雰囲気が魅力とよく言われますが、それは汚れた街という意味ではないはずです。(下北沢の商店街進行組合理事長)<sup>(7)</sup>  
・落書きが犯罪であることは分かっている。でも自己表現はしたい。自分たちのグループは公共物にしか落書きしないし、周囲の景観と合った作品しか描かない〔…〕街はコンクリートばかり。無機質で人間を威圧するから、抵抗している。街角にもっと表情があっていい。僕らの目的は街に表情をつけるこ

と。(日本のあるグラフィティ・ライター)<sup>(8)</sup>

これらの言葉からは、言語化不能に見え、すれ違う対立の根底にある何かを読み取ることができかもしれない。それは、もしかしたら美意識、文化感の相違なのではないか。

前項の「明るさ」と「暗さ」の図式を利用するならば、否定的意見の人々の見解は次のようなものとして言い表すことができよう。すなわち、「落書き」によって「汚され」「暗くなった」状況を改善し、「きれいで」「美しい」状態へと修繕していくこと、つまり「明るい」状態を取り戻そうとしていくことである。

しかしいくら修繕をしても、次から次へとグラフィティは描かれていく。(Walsh, 1996=2003, p.61) それはまるで癌のようであるとも形容される。

・ただペンキで落書きを塗りつぶすだけでは、新しいキャンパスを提供するに過ぎない。(平塚をみがく会会長)<sup>(9)</sup>

・だけど強制撤去するのは、縫わなきゃならない傷に、バンドエイドを貼ってごまかすようなものだね。グラフィティっていうのは、その上をきれいに塗ったり、薬品をかけたりすればなくなるものじゃない。それだけは保証するね。(ツイスト [サンフランシスコ])(Walsh, 1996=2003, p.45)

グラフィティという現象とそれを巡る攻防戦を、破壊行為と犯罪対策の議論だけで理解することはできないし、グラフィティ・ライターの自己欲求の充足という心理的側面だけで理解することもできない。そこには、「明るさ」への志向と、明るさの逆のものとしての「暗さ」への志向という、一見すると相反する対立が横たわっている。それは美的意識の相違をも包摂した、文化的、社会的な対立であり、そのような不可視の対立が、都市空間のなかに顕在化したのが、このグラフィティという現象なのではないか。

#### (4) 半-言語的、半-記名的 ?

グラフィティ・ライターは、各々が自らの名前、あるいは自分だけの持つ固有のデザインを街中に記していく。描かれた文字は、アルファベットを極端に変形させたようなもので、その判読は容易ではない。しかしそれは、「言葉の構築と伝達」であり「名を記すこと、習字的な表現性、および言葉の変形操作」(高祖, 2003, p.70)であるという。それはまた「言語とアートの間にあるような表現形態」(酒井, 2002, p.63)という意味で、半-言語的でもある。

グラフィティの軸にあるのは、あくまで「名まえ(タグ)」であるが、それを記した人物が誰であるのかということは、通常表面化してこない。それを明らかにすることはグラフィティ・ライターの首を絞めることになる。「グラフィティにとって、『だれ』の表現、つまりタグとはあらわれながら隠れる方法である。」(酒井, 2002, p.65) その意味でグラフィティの記名は、半-記名的でもある。

そのような半-言語的、半-記名的なものとしてのグラフィティが、記名済みのつまり管理者・所有者の存在が明確化されている建築物・構築物に、描かれていく。

それはあたかも、所有者・管理者が十全かつ厳密に決定されている、構築物・建築物・空間の「被所有」という事実に、表層的レベルで難癖をつける(否定する)行為であるかのようなのである。

一方でグラフィティはまた、記名の消失しかけたつまり所有者・管理者の存在が抹消しかけ、不確定になっている構築物・建築物にも、描かれていく。それは、未・低利用の空間が、土地の有効活用と再開発・リニューアルの過程のなかで、あらためてその所有者・管理者の姿を明確化させていく過程への、暗



黙の反抗のようにも見える一方、ある場合においては、都市の暗部の「暗さ」を象徴的に表現し、逆説的にはあるが 人々にその事実をつきつける役割を果たすこともある。

トンネル内の両側歩道のコンクリート壁には、落書きが繰り返され、「暗くて汚い」イメージが定着している。このため、住民もあまり通りたがらなかった。周辺の公園などにはホームレス約30人が暮らし、生徒たちがからかうこともしばしばあったという。<sup>(10)</sup>

これは、グラフィティが描かれることによって、見捨てられていた都市空間のなかの暗部が、人々の意識に顕在化されてきたひとつの例であろう。しかしその効用は、街中へのボム（グラフィティを描くこと）を試みるグラフィティ・ライターたちにとっては逆説的な帰結であり、意図されざるものであったと思われる。この新聞記事は、ホームレスと中学生がトンネルの壁に絵を描いたという事実を伝えるものであるが、それはその空間に起こっている問題を根本的に解決するはずもなく、あくまでもそのトンネルの見た目の暗さを表面的に修繕しただけの、いわば急場しのぎの解決であることは明らかである。

グラフィティ・ライターとそれを肯定する人々がグラフィティに抱くところの、半-言語的、半-記名的性格は、グラフィティを否定する人々にとっては、言語にあらざるもの、身勝手に無意味で独善的な記名行為としてしか受け取られない。それは不可解かつ不条理な現象であろう。しかし、そのようなものと類似した不可解性、不条理性は、再開発への批判的言論のなかにおいても、見つけ出すことができる。

昨年 2002 年後半、中央区が突然「日本橋東京駅前地区地域懇談会」という会を作りました。[...] 都市整備部長の[...] 説明では[...] 「東京駅前一体整備案」であることが知らされました。この会は発足当初から 31 町会長など関係者以外を入場させず、何が議論されていたかも分らないまま 3 月 18 日に記者会見、東京都や国に上げられて、3 月下旬には東京都が認可すると説明されています。[...] しかし、公式にどんな内容なのか地元の人達が容易に見る事が出来ない状態です。これが「地元案」という形で具体化しようとしています。「地元が知らない地元案」です。(京橋・日本橋・八重洲 地元有志)<sup>(11)</sup>

「開催時間にも配慮を！」と区へ要望したにも関わらず、平日午後のみ開催の再生推進懇談会・検討会が繰り返され、一度の聞き取り調査を経て[...] 区から私たちに提示されたのは超高層オフィスビルの建築案でした。えっ、これが他の京橋地区の”モデル”になり得るの？隣接地域の既存ビル経営に打撃を与えないの？、これは一体、「誰の誰による誰の為の再開発案」なんだろう？、と様々な疑問が浮かんできました。(再開発地区の住民)<sup>(12)</sup>

これらの言葉には、再開発案の審議・決定が、密室的な協議会・懇親会の中のみで行われたことへの批判が表されている。それは住民を巻き込んだ十分な言葉による議論が成立していないことと、誰がその議論の主体であるのか、つまり発話者・発案者が誰であるのかが明かされていないと感じる住民がいるにも関わらず、その協議会が公的性質を持ち得るということへの批判でもあろう。その意味でここにも、半-言語的、半-記名的ともいいうる状態の存在が伺い知れる。そして、そのようなこの協議会・懇親会の姿から浮かび上がってくるのは、住民たちがグラフィティを目にしたときに感じる不可解性、不条理性と通底した、怒りのようなものではないだろうか。

## (5) 都市計画と忘却

都市計画は時に町並みや街区の大幅な変更を引き起こし、ある場所の持っていた特性や空間性を一挙に変転させる力を持つ。空間の大幅な変化はその場所に住み働く人々を一時的あるいは永続的にその場所から引き離し、人々の記憶は忘却される。それまでの親しみやすかった空間性は消失し、人々は新たな空間性の中に身を置くこととなる。

今福龍太(1955生)は、1960年代、大都市近郊のあちこちに「団地」が建てられ始めた頃の戸惑いについて、次のようなコメントをしている。

この時、何か違う現象が起こってしまったという感覚はあったね。自分の子供時代の遊び場、それは海岸地帯特有の砂丘だったり松山だったり、湿地だったり、それぞれが遊び場として自分たちだけの意味をもっている空間が一つ一つ失われて、消えていく。[...]ぼくの直感的な感覚では、自分の生きていたトータルな世界が断片化されて違うものになってゆく、そしてそこにはもはや同じ遊びのコードが成り立たないような全く別の空間が現れてきたという感覚だった。団地なんて本当に最初は どう理解しているかわからない場所だった。<sup>(13)</sup>

場所の様態が、数十年、数年、あるいは数日のうちに大きく変化する都市空間の中で、私たちは場所の様態の激しい変化という外在的理由によって、潜在的に、あらゆる記憶を長い間とどめておくことを不可能にされてしまう状態の中に立たされている。

ある街並み、ある場所、一つの建物には人々の記憶が充満している。しかし破壊、改築、新築、整備により街並みは変わり、場所の持っていた雰囲気や特性は入れ替えられ、ある場所に滞在し、充満していた人々の記憶は散乱してしまう。大規模な災害の襲来、あるいは、大規模な再開発 それは、全て一度壊されてしまうという意味で災害と類似している 後には、街区すら変化し、人々の場所感覚が完全に消し去られてしまう。散乱した記憶のほとんどは、記録されることなく、忘れ去られていく。

次章にて参照する、現象学的地理学の書物『場所の現象学』の著者であるエドワード・レルフは、開発業者、計画担当者、官僚などが設計する、よく考慮され計画された景観を「理屈と熟慮による景観」と言った上で、次のように記している。「『熟慮』による景観の設計者[...]は、地域性と歴史のような測ることのできない質的なものには基本的にはかわりあわない。彼らの関心は、[...]効率的で適切な住居、輸送、娯楽施設を提供するという全く合理的な目的、あるいはカネもうけにある。」(Relph, 1976=1999, p.260)

そしてその「熟慮」の景観は、公共の利益のために公共の消費を目的としてつくられたという意味で公共的であり、それらの景観の特徴は「均質化されている」ことにあるという。(Relph, 1976=1999, p.261-262)

なぜなら、それはすべての社会経済的階層の人々の要求に応えなければならないからである。それは容易に受け入れられるものであり、気分を高揚させたり消沈させたり挑発的なものに感じられることはほとんどない。それは十分に愉快で心地よい。それは適切に機能する。しかしそれは、それ自身の本当のアイデンティティをもった景観ではなく、個人や集団としてのかかわりを育むこともない。なぜなら、それらは公共の利害とは一致しないからである。(Relph, 1976=1999, p.262)

現代の東京における再開発では、あらゆる公共的空間はむしろひたすらに商業的空間へと改変されている。それは没個性的、没場所的な状態から、表層的なテーマ性に彩られた、ディズニー的なものへと変化してい

る。その各々には若干の違いはあるが、全面的な商業空間化を果たしているという意味では「均質化」している。

#### (6) 建築物の消費化

日本に建築留学をしていたキース・クロラクは、はじめて日本に来たときの心境を次のように記している。「古くなった家電製品同様、都市を構成する個々の要素は、まったく止むことのない、再生のプロセスの中にあるようだ。即ち、都市における『建築 商品』は、時には驚くほどのペースで捨てられ、新しいバージョンに更新されていく。[...]本質的に東京の人々は、建築を舞台の書き割りから見なしている。建築は、連続する都市の『劇』の背景として計画、建築そして利用されている。また建築はその役割を終えると、すぐに新しい背景に取って代わられる。しかしながら、この仮設性こそが、この都市にダイナミズムと活力を与えていることも確かである。」(Krolak, 2001, p.158) この言葉は一時期の東京の様態を表してはいた。確かにある時期において、人々は開発による忘却を快楽として受け入れることが可能だった。人々は大量の物を消費するのと同じように、建物や場所を消費した。

五十嵐太郎は海外の建築家の言葉に触れつつ次のように記している。「東京は『非常に変化のスピードが速い所』(M・ボッタやS・ロパタ)であり、[...]N・コーツも『東京スピード』を指摘する。これはまさに資本の投機される速度のことだ。建築はそれを正確に反復している。仮設的な施設も生む。しかし、バブルの崩壊後、速度と密度のモデルはむしろアジアの熱い現代都市にシフトしていく。」(五十嵐, 1998, p.83) ここにあげられた幾人かの建築家の言う「東京のスピード」とは、つまり建設に投資される額と速度の問題であった。それは右肩上がりの経済成長と、その後に訪れた極大点としてのバブル経済のなかで、一瞬可能であったことに過ぎない...はずだった。

バブル期に80兆円を超えていた建設投資額は、1997年度以降減少に転じ、2003年度には50兆円代にまで落ち込んでいる(国土交通省総合政策局情報管理部建設調査統計課、2003、金額は全国の建設投資額〔名目〕である)。その一方で1990年代半ば以降も、大都市における超高層ビルの再開発ラッシュが起きている。計画中のものも含めると2000年以降、都区部に200棟前後の超高層ビルが林立することになり、その光景は「まるでバブルの再来を予感させもする。」(矢作, 2003, p.5)

日本の大都市にはまだ、これから着工されるいくつかの大規模な開発プロジェクトがある。既存の建築物の改修や再生も行われていくだろう。しかしそれは、長期に渡りスクラップアンドビルドをつづけていくだけの資金的余裕があることを意味はしない。そしてそれらは、いつでもすぐに廃墟になり得てしまうような危うさにつつまれた建築物なのではないだろうか。若林・内田が、湾岸の建造物について語った次の言葉は、そうしたスペクタクル化した都市再開発空間の危うさを言い表している。

湾岸の構造物について言えることは、あれは資本の生の表現なのだということではないでしょうか。[...]人間の場合だと廃墟になっても壊れたビルでもどうにかして住むでしょう。つまり、われわれの生活はいろんなことがあっても、なかなか壊れないんです。[...]けれども、湾岸の構造物はいつ廃墟になってもおかしくないし、しかも、根拠がゼロというか、無根拠性を直接に内包していると思うのです。(若林・内田, 1997, pp.66-67)

未だ資本の投下スピードの速い大都市において、老朽化した建物は、改修や改築を施され、あるいは路地裏や商店街のアーケード、ビルの影に隠され、またはある特定の街区に追い込まれ、古びた外装は表向きは

見えないように隠されている。しかし地方の小都市を巡ってみれば、閉ざされたシャッター、さび付いたアーケード、ただ古さを増していくだけの建物が、駅を中心とした旧来の街のメインストリートに平然と立ち並ぶ光景が目に入る。資本投資の金額とスピードで見れば、大都市と地方の小都市との差は歴然としている。

地方の小都市で見られるこの光景は、経済の停滞、建設投資額の縮小のなかで、やがて大都市の現実と化してくるのではないか。綺麗で安全な街を維持するためにかかる費用、モニュメンタリーでディズニー的な消費・娯楽施設をつくることによって、都市に住む人々に楽しみを与えつづけるための建設の費用、こうした莫大な費用を、今後も十全かつ継続的に供給できるという保証はどこにもない。

そのような心配が払拭できないにもかかわらず、当事者や周辺住民との十分な協議や議論の場を排除した形で、建設される超高層ビルと公共的空間の消費空間化、一方で散見されるグラフィティなどの現象。これらの現象が都市の構築物や建築物の表層を覆っていく状況が、どのような危険性を孕んでいるのか、それを考えるための手がかりを、次章以降、探っていきたい。

## 第二章 空間-場所-人間

### (1) 現象学的地理学

ここまで、現代の東京の都市空間について、再開発とグラフィティという二つの現象を手がかりに、探りを入れてみた。しかしながら「空間」と「場所」というものの関係性について、あるいは都市空間の様態が人間の意識や行動、さらには社会的様態にたいして、どのような影響を与えるのかといった点については曖昧なままとなっている。本章では「現象学的地理学」を標榜する二つの書籍、イー・フー・トゥアンの『空間の経験』と、エドワード・レルフの『場所の現象学』に触れながら、これらの点についての考察を進めていきたい。

現象学的地理学は、人間主義的地理学などとも呼ばれ、計量分析的（客観的）な視点からの地理学へのアプローチに対して、「人間とのかかわり」に基点を置きながら、空間や場所について探求をしていこうとする、1970年代の後半に登場した試みであった。（高野，1991，pp.332-333）

レルフは「空間の様々な形態が直接経験と抽象的思考とを両極とする連続した範囲の中に存在」（Relph, 1976=1999, p.42）するという考えのもと、最も直接経験に近いものから順に、空間を「原初的空間」「知覚空間」「実存空間」「建築空間と計画空間」「認識的空間」「抽象的空間」の六つのカテゴリーに分類して考えている。なかでも「生きられた空間」としての「実存空間」は、「原初的空間」や「知覚空間」に比して相互主観性が高く、「建築空間と計画空間」「認識的空間」「抽象的空間」といった抽象的な空間認識に比して具体的な経験と結びついた空間のカテゴリーである。

ここで着目すべきは「生きられた」という言葉である。「生きられた空間」としての「実存空間」について、レルフは次のように記している。「実存空間ないしは生きられた空間とは、ある文化集団の構成員として私たちが世界を具体的に経験するなかで明らかになるような、空間の内的な構造である。それは相互主観的であり、それゆえその手段のすべてのメンバーに対し影響を与えるものである。」（Relph, 1976=1999, p.52）

空間内に位置を占める「生きられた」存在としての身体こそが、「生きられた空間」としての実存空間（=世界）を経験するための条件となっている。（Tuan, 1977=1993, p.68, p.162 . Relph, 1976=1999, p.42）

このような空間認識を前提とした上で、現象学的地理学が次の三点をどのように扱っているのかを整理しておきたい。第一に、空間と場所の関係性について。第二に、建築物や都市の構築物が人間に与える影響について。第三に、抽象的思考による都市計画の問題性と、没場所性についてである。

### (2) 空間と場所の関係性

レルフにおいて場所は、次のように規定される。「第一に、かかわりをもつ人間集団の興味や経験によって規定される、特定の意義を持つ『地区』ないしは『地域』の集合がある。[...]これらは、意志と経験の志向と強さを反映し、実存空間の構造軸の役割を果たすパス〔通路〕によって結び合わされ、開かれたものとなる。[...]そうしたパス〔通路〕が発し、集中する結節点が「場所」なのである。」（Relph, 1976=1999, p.68）

よって実存空間における場所は、「意味の中心、意志と目的の焦点」（Relph, 1976=1999, p.69）である。その場所は、「外部とは何か異なるものとして経験され得る『内側』を有しなければならない。」（Relph, 1976=1999, p.69）

一方トゥアンによれば、「ある空間が、われわれにとって熟知したものに感じられるときには、その空間は場所になっている」（Tuan, 1977=1993, p.136）のだという。つまり空間の中で、ある特徴的な地点への親密さ

の度合いが高まったとき、そこは場所になるのである。親密さの度合いが高まるということは、その場所が特徴的な経験との繋がりを有するということであり、その意味でレルフとトゥアンの場所の定義には共通点がある。

### (3) 建築物や構築物が人間に与える影響

建築（形態）は人間の意識や感情に影響をあたえる、力をもった環境となる。それは、人々に内と外、閉と開、暗と明、私と公の相違のような感覚を明確化する（Tuan, 1977=1993, p.183,p.191）。環境となった建築（形態）は「言語と同じように、感受性を明確かつ精妙にする力をもっているし、意識を鋭く大きくする力をもっている」（Tuan, 1977=1993, p.191）そのようなものとして現代の建築（形態）は、社会の秩序をはっきりと表しており、「建造された環境のなかにあるさまざまな看板やポスターは、記号として機能し、知識情報をあたえ教え諭す」という意味で、建築は教育の機能も有している。（Tuan, 1977=1993, pp.205-206）

「建築家は科学技術の助けを得て、新しい形態を創出することによって、もしくは旧来の形態をそれまで試みられることのなかった規模で作り直すことによって、空間に対する人間の意識を拡大し続けているのである。」（Tuan, 1977=1993, pp.205-206）

しかし建築家がつくりだす空間においてはまだ、かろうじて文化的教育力のようなものが備わっているかもしれないが、都市計画においてはそのような要素はすっぱりと抜け落ちてしまうというのがレルフの指摘である。「原理や理論や概念が何であれ、創造された建築物という形をとる建築家の作品は、その利用者や見る人によって、場所として、あるいは人間の連帯と意義の中心として、何らかの仕方ですべて経験されるだろう」（Relph, 1976=1999, p.73）「都市計画において使用される場所の概念は、これとはまったく違う。都市計画においては、場所の概念はせいぜい、そこである特定の相互作用が発生し、いくつかの限られた近隣住区ないしは任意に設定されたコミュニティの中のショッピングセンターないしサービスセンター、といった類のものである。これは明らかに空間的な経験にはほとんど依存」しない。（Relph, 1976=1999, p.73）

現代の東京において、無秩序的な都市計画は、各々の建築物の野蛮性とパラレルなものとして成立している。そこで語られる建築物の理念なるものは、何らかの特徴的なものを持っているかに見えつつ、しかしそれらはいずれもツーリズム的な、ディズニー的な消費志向的一般性にむしばまれていて、さらには空間のフラット化と「明るみ」への志向などの点で、それらは建築としての独創性を持っているというよりは、消費と防犯、高層化という床面積の増大という功利的目的に従事しているだけだ。その意味で現代の再開発建築は、統一的で整った都市計画がない状況においてですら、都市計画的であるのだ。

建築家が技術力の助けにより創出する新たな建築的空間は、いつでも人間の空間に対する意識を拡大するとは限らない。それは建築家の創出する建築的空間のあり方次第では、人間の空間に対する意識を縮小する可能性すら持っていることを指摘しなければならない。

### (4) 抽象的思考による都市計画の問題性

「生きられた空間」としての実存空間とは対照的に、「建築空間」・「計画空間」は無意識的で抽象的な空間の経験に基礎をおく。[...]現代の都市計画における空間は、第一に地図と計画図における二次元の認知空間なのである。このことは、格子と曲線からなる街路形態の利用の普及や、土地利用における機能地区の念入りな分離、および交通網の無頓着な配置などに明らかである。」（Relph, 1976=1999, pp.70-71）

このような都市計画的な考え方は、抽象的な空間認識の態度によって立つものであるが故に、批判されて

いる。トゥアンは言う。

地理学者は、空間と場所についての自分の知識はもっぱら本、地図、航空写真、組織だった実地調査から得られるものであるかのように話し、また、人間に備わっているのは精神の知的働きと視覚だけであって、それ以外には、人間は世界を理解し世界のなかに意味を見いだすための感覚を何もっていないかのように著述する。また、地理学者と都市計画 = 建築家は、「世界のなかにある」とは本当にどのようなことであるかを描写し理解しようとするよりも、そんなことはすでに分かっているという前提で話を進める傾向がある。( Tuan, 1977=1993, p.356 )

このような空間は、レルフの空間カテゴリーで言うところの、「認識的空間」と「抽象的空間」にあたる。「認識的空間」はユークリッド的な空間と関係し、場所は、座標により定義される位置として理解される。認識的空間は等質、均質な空間である。「それは深い考察の対象とされる空間の一形態であり、もし幾何学と地図と理論が少なからず計画や設計の基礎として用いられるということがなければ、直接経験に対してはほとんど意義を持たないはずの空間である。」( Relph, 1976=1999, p.76 ) 一方「抽象的空間」は、「認識的空間」をさらに相対化したような空間カテゴリーである。「抽象的空間とは、私たちが経験的な観察の対象として必ずしも描けない空間でも記述することができるような、論理的関係の空間である。」( Relph, 1976=1999, p.76 )

そしてそのような抽象的空間や認識的空間は、物理的な物との関係性を有していない。「『我々は、抽象的空間は物理的ないし心理的現実の中に対応する物や基礎を何も持っていないことを認めなければならない』とカッシャーは断言している。」( Relph, 1976=1999, p.76 )

二次元的な地図上の抽象的視点から計画された都市は、生きられた身体 が経験するところの 生きられた空間 とは乖離する傾向にある。そしてこの性質は、自らの暮らす場所を構築することのできない貧民の存在を考慮したとき、一層の問題性を帯びてくる。

貧しい労働者階級の人びとは、自分たちで設計した家や地区に住むことはできない。かれらは、裕福な人びとが捨てていった住居か、新たに建てられた公営住宅に移ってくる。どちらの場合も、その物理的構造は居住者の理想を反映したものではない。[...] それとは対照的に、裕福な人びとは自分で設計した環境に住むことができる。( Tuan, 1977=1993, pp.304-305 )

つまり経済的な貧困者は、自らの理念や考えに基づいて自らの住む場所を選ぶことはできず、その点で、日々の生活を営む街や住宅といった、「生きられた」生活の実現に大きな影響を与える構造物の設計を、富裕者や公共機関に委ねざるを得ないのだ。そのような構図において、富裕者や公共機関が、貧困者に対して何らかの管理的意図をもった空間設計をおしつけることは、容易に可能となるであろう。

#### ( 5 ) 没場所性と根付くことの権利

前項で記したような「生きられていない」場所を、レルフは「没場所性」という言葉によって説明する。「没場所性」とは、「どの場所も外見ばかりか雰囲気まで同じようになってしまい、場所のアイデンティティが、どれも同じようなあたりさわりのない経験しか与えなくなってしまうほどまでに弱められてしまうこと」である。( Relph, 1976=1999, p.208 ) 「没場所性」を助長するプロセスには、キッチンやテクニークの価値観に結びつくものとしての、メディアの存在があるとされている。ここでいうメディアには、「マスコミ、大衆文

化、大企業、強力な中央集権、そしてこれらをすべて包含する経済システム」(Relph, 1976=1999, p.208) が含まれる。

「没場所性」の建築様式は、次のような問題性を孕んでいる。第一に、それは整然とし単機能的であり、それらの機能活動は分割されている。それは「安易な排他性」の実践された空間である。分割された活動の拠点は、効率的なコミュニケーション・システムによって関連させられているから、混交や不調和を招くことはない。密集性は「暖かさと包容力に満ちた安息所」を生むが (Tuan, 1977=1993, p.122) このような空間において密集性は排除されているから、それはきわめて他人行儀的で無機質な空間となり、親密さは醸成されない。

第二に、それは物から乖離している。物は、時間をつなぎとめており、人は、ある場所に訪れることによって過去の記憶を再構築することができるが (Tuan, 1977=1993, p.333) 没場所性においてそれは不可能となる。没場所性において目にできる景観は、現在についての景観であり、大衆的で理想化されたイメージにあうような過去や将来しか暗示させはしない。( Relph, 1976=1999, p.283 )

「没場所性」のもたらすこのような側面のもつ根本的なあやうさは、人間にとっての空間や場所が持つ重要性が捨象されていることにある。空間や場所の重要性について、トゥアンやレルフは次のように記している。「空間は〔…〕人間にとっては、心理的に必要なものであり、社会的な当然の権利であり、さらには、精神の内容を象徴するものですらある。」( Tuan, 1977=1993, pp.108-109 )「根付くことに対する欲求は、秩序や自由、義務、平等、そして安全に対する欲求と少なくとも同等の価値をもつ。」( Relph, 1976=1999, p.102 )

そしてそれは単に人々の個別的な権利であるのみならず、社会的なアイデンティティの源泉であるという意味でも重要性を持つ。

場所は抽象的な物や概念ではなく、生きられる世界の直接に経験された現象であり、それゆえ意味やリアルな物体や進行しつつある活動で満たされている。それらは個人的なまたは社会的に共有されたアイデンティティの重要な源泉であり、多くの場合、人々が深く感情的かつ心理的に結びついている人間存在の根源である。( Relph, 1976=1999, p.294 )

そしてこれらのことから浮かび上がってくるのは、空間や場所を安易かつ大規模に改変することが、人々の場所・空間意識を破壊するという問題性であり、またそればかりでなく、そのような問題性から想起されるような、人々にとっての共通世界の崩壊と、公共性の瓦解である。



### 第三章 公共性と都市空間

#### (1) アレント『人間の条件』の視点から

ハンナ・アレント(1906-1975)は、『人間の条件』において、人間の活動力を「労働」「仕事」「活動」の3つに分けた。

「労働」とは「人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力」(Ardent, 1958=1994, p.19)である。これは、人間が生命の必要を満たすための活動力であり、人間と自然との新陳代謝にも例えられる。近代、とりわけその製造過程がオートメーション化した段階以降、人々は、労働し生産した物をただちに貪り食うような、とどまることの知らぬ自然的サイクルの中を循環しており、「労働する動物」の余暇時間は、消費以外には使用されず、時間があまればあまるほど、その食欲は貪欲となり、渴望的に」(Ardent, 1958=1994, p.195)となり、消費の対象物はもはや生命にとって不要な物に集中するようになっていくとアレントは指摘する。労働や消費が安楽になればなるほど、人々は生命の必要に突き動かされている事実を忘れ、生命の空虚さを認めることができなくなる(Ardent, 1958=1994, pp.197-198)ばかりでなく、世界の物が、すべて消費と消費による絶滅の脅威に曝されてしまうのである。(Ardent, 1958=1994, p.195)

「労働」で生産された物が、不安定で常に腐敗する「消費対象物」である一方、「仕事」の活動力によって造られた物は、より安定的な「使用対象物」である。「使用対象物」も「消費対象物」同様、それを使用すれば解体は避けられない。しかし「使用対象物」は耐久性を持つから、保存のための普通の世話があればそれで永続する。世界の物がそれを生産した人間から相対的に独立しているのは、その耐久性のおかげであり、しかも世界の物は、「それを作り使用する生きた人間の貪欲な欲求や欲望にたいし、少なくともしばらくの間は抵抗し『対立し』、持ちこたえることができる。」(Ardent, 1958=1994, pp.224-225)それ故に世界の物は「客観性」を有し、人間生活を安定させる機能を持っている。

このような世界の客観性、物の世界の安定性を前提としてはじめて、「物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力」としての「活動」が可能となる。「活動」は、共通世界としての公的領域において、言葉(言論)と行為(活動)を介して成り立つ活動力である。それは、不安定性と不確実性という危うさを伴う。なぜなら、「活動」は人間関係の「網の目」のなかで不可予言的に反復されていくからである。一つの活動は一つの反動を生み、その反動はまた別の反動や別の過程を打ち立てる。その意味で「活動」は無制限的であり、不可予言的なのだ(Ardent, 1958=1994, pp.294-311)

アレントは古代ギリシアの都市国家における公的領域と私的領域の関係性に一貫してこだわりつつ、『人間の条件』を記述しているが、古代ギリシアにおいて明確であった公的なるもの(public)と私的なるもの(private)は、近代の初頭において、ともに社会的なものの領域へと変化したと指摘する。「公的なるものは私的なるものの一機能となり、私的なる物は残された唯一の公的関心になった」(Ardent, 1958=1994, p.98)のである。

その社会的なものの領域において、「仕事」は過程化し「労働」の性格を帯びるようになり(「仕事」の「労働」化)(...b)、一方「活動」もまた過程化したとアレントは指摘する。過程化とは、「人間なしには決して実現しないような新しい自発的な過程を始める能力」(Ardent, 1958=1994, p.362)(...a)を自然の中へ導入した結果創造される、「基に戻すことのできない不可逆的な『返らざる[...]』」自然の「過程」のことである。

(a)「活動」の過程化は、活動の不確かさを除去し、人間事象を、人間による製作の計画的産物であるかのように扱うが、活動過程をそのようなものとしてとらえることは、(人間の)多数性という条件のもとでのみ

有効である「許し」と「約束」の能力　これらは活動能力を一つの行為のなかで枯渇させず、耐久性をもって持続させていく活動の原動力でもありと考えられる　を捨象してしまうという点で危険なのである（Ardent, 1958=1994, p.362）。そしてこの「活動」の確定化、計画化の欲求が、社会的なものの領域においてもっとも顕著に見られるのは、近代における統計学においてである。統計学において「活動の結果や出来事は〔…〕ただ逸脱あるいは偏差としてしか現れない。」（Ardent, 1958=1994, p.66）しかし、「日常的な関係の有意性が顕になるのは、日常生活においてではなく、まれな偉業のなかにおいて」であり（Ardent, 1958=1994, p.66）そのような「法則を政治や歴史に適用することは、政治や歴史の主題そのものを意図的に抹殺すること以外、何事も意味しない」のであり、その意味でアレントは統計学的なものを批判している。そしてこれは、前章でみた現象学的地理学の態度にも通底するものでもある。「一般的に科学の問題や手法は生きられた世界の事柄を扱うにはあまり価値をもたないことは明らかである。」（Relph, 1976=1999, p.207）

(b) さて、一方「仕事」の過程化の帰結としての、「労働の性格を帯びようになった仕事」も、「活動」を可能たらしめる共通世界〔世界性〕の存立を不利な状態へと陥れる。そもそも「仕事」の「労働化」には二つの意味が含まれる。それは第一に、仕事が労働の様式で行われるようになったということであり、第二に、仕事の産物である「使用対象物」が、労働の産物である「消費対象物」のように消費されていることである。（Ardent, 1958=1994, p.362）もう少し具体的に記述された部分を引用すれば、「今や、椅子やテーブルは、服のように早く消費され、ひるがえって服は、ほとんど食物のようにすばやく使用済みとなる。しかも、世界の物とのこのような交り方は、それらが生産される方法と完全に対応している」（Ardent, 1958=1994, p.185-186）のである。

「仕事」によって造られる「使用対象物」は耐久性を持つがゆえに客観的存在であり、それはまた、不安定で不確定的な「活動」を可能にするための、人と人の間に置かれた安定的介在者としての役割を有した。それはリアリティのある介在者でもあった。言い換えれば、十分に安定的で耐久性を持つ、仕事によって造られた「物」の世界があってはじめて、言葉（言論）と行為（活動）という不安定なものによって成り立つ「活動」は可能となっていたのである。「人びとが活動し始める以前に、すでに一定の空間が確保されていなければならず、すべての活動が行われる以前に、すでに一定の構造物が建てられていなければならなかった。」（Ardent, 1958=1994, p.314）

しかしこのような「物」の安定性は、仕事が労働の性格を帯びようになった時点で、失われることになる。「かつては、人間の工作物である世界を、〔…〕自然から保護し区別する境界線が存在した。ところが今や、私たちは、あたかも、この境界線を無理やりに関け放ち、たえず脅威に曝されている人間世界の安定を〔…〕放棄してしまったかのようである。」（Ardent, 1958=1994, p.188）

そのとき、私的領域を取り囲んでいた「家のまわりの垣」は取り払われ、私的領域は社会的なものの領域のなかにさらされることになったのであった。それはまた、私的領域に閉じこめられていた労働を、社会的なものの領域のもとにさらし、それ以降、労働は、監視されることと不可分の活動力へと転化したのであった。（Ardent, 1958=1994, p.103）

つまりこれらの指摘からは、都市の建築物・構造物自体が消費の対象物となり物の安定性が失われた時に、そこにおいて人々の空間のリアリティは喪失してしまうのではないかという問題点を読みとることができる。それは物の不安定性によって引き起こされる世界性の喪失という理論的側面においてだけではなく、統計学的思想に裏打ちされた都市空間の不安定性の除去、確定性への志向といった現在の都市の現実を見る中で、よりリアリティをもったものとしてとらえることが可能になるだろう。

## ( 2 ) 場所の力

社会的なものの領域は、都市において集中化した形で露出する。トゥアンは記している。「都市は一つの場所であり、とくに意味の中心である。都市は、非常によく眼に見える数多くの象徴をもっているが、それ以上に重要なのは、都市自体が一つの象徴になっているということである。」( Tuan, 1977=1993, p.307 )

社会的なものの領域は、近代の都市との密接な関係を持っている。仕事の労働化、活動の不可能化と統計学的科学思想の進展は、住居、工場、商業施設(消費施設)と、まさにそこで労働し活動しようとした数限りない人々の生の様態や行為に影響を及ぼした。その痕跡は、都市の歴史のなかに静かに刻まれている。都市の歴史とはすなわちそうした人々の対立の歴史ではなかったか。その意味で、出来事と関わりのある場所を保存することが、歴史「教育力」を醸成し、社会の絆を結びつける働きをもつとの視点で、場所保存の重要性を論じているドロレス・ハイデンの『場所の力』は参考となる。

アイデンティティは人間の記憶と分かちがたく結びついている。それは、例えば生まれ育った場所、住んできた場所に関わる個人の記憶と、その個人の家族、隣人、仕事仲間や民族同士の歴史と結びついた集団的あるいは社会的な記憶である。都市のランドスケープはこれらの社会の記憶を収める蔵でもある。

( Hayden, 1995=2002, p.33 )

場所と結びついた人間の記憶が人々のアイデンティティとなり、間主観的な記憶を醸成するというこの指摘は、とりわけ対立や闘争の起こった場においては顕著になるだろう。

「すべての都市や町にテリトリーを求める闘争が繰り広げられたランドマークがあるはずである。このようなランドマークとなる建物を見つけ出し、その建物の歴史に解釈を与えることが、空間が持つ社会的政治的意味を都市のランドマークの歴史に一体化させる、もう一つの手法である。」( Hayden, 1995=2002, p.65 )

対立や闘争の場は、奇跡の起こる場でもあった。しかし現代の都市空間において、そのような不安定性、不確定性を引き起こしかねない因子は、着実に取り除かれつつある。公共空間の至る所にその設置台数を増加させつつある監視カメラに顕著に見られるように、リスクの空間はセキュリティの空間から隔絶され、遮断されていくのである。

かつて異質な人びとが入り交わり合う空間であったメトロポリスはいまや等質な『飛び地』に断片化し、民主的な公共空間はそこから駆逐されてしまった[...]。人びとが生きる空間が分断されてきていることは、公共性にとっては大きな驚異である。[...]ある空間を生きる人びとが提起するニーズ解釈や不正義に対する訴えは、別の空間を生きる人びとにとってはまったく現実味を持たないだろう。( 斎藤純一、『公共性』岩波書店、2000 )

このような問題意識に立ち、次章では、都市工学と監視社会の問題に焦点をあてていきたい。

## 第四章 都市工学と監視社会

### (1) 監視技術の進展

「CCTVカメラを「高度」コンピュータ・システムに接続した[...]地下鉄セキュリティー・システム[...]は、群衆の流れをモニターし、危険な混雑があれば警告を発する。立ち入り禁止区域への進入等の逸脱的行動が見られた場合にも警報を発し、さらに、少なくとも触れ込みによれば、自殺の兆候すら見抜くということである。(Lyon, 2001=2002, p.104)」この衝撃的な記述は、2001年現在ロンドン、ミラノ、パリの地下鉄構内に試験的に設置されている、監視カメラと検出ソフトを組み合わせた、現実に存在するセキュリティー・システム「クロマティカ」についてのものである。それは本来立ち止まる必要のない場所での立ち止まりや、立ち入りを禁止された場所への立ち入り行為を自動的に検出し、システムのモニタに警告を発するものだという。「無許可の物売り、物乞いなどの『不審人物』が構内に入ると、ただちに正確な居場所が探知される。もし1分以上動かなければ、その人物の画像は監視スクリーン上で緑色に変わる。2分を越えると赤に変わり、警告が表示される。あまりにも長くじっとしていることや、正しい方向に歩かないこと、グループで立ち止まること[...]は、いずれもあやしい行為とされ、カメラによって即座に告発されるのだ。」(Mazoyer, 2001)

もともと近代の都市は、その都市構造に最大限の可視性を与え、街頭や物理的構造物を利用して視線を張り巡らすことによって、逸脱を封じ込めようとする、管理化・秩序化の意図をもって設計されたものであったが(Lyon, 2001=2002, p.92) 現在の監視の形態は、その監視の目を科学技術に移し替えたばかりではなく、人々の行動を予測し先取りしようとするレベルにまで達している。

監視の目的は「必ずしも現実の出来事[event]すべてを視野に収めることではなく これも引き続き重要な目標だが、それよりも、行動を先取りすること、あらゆる不測の事態[eventuality]に備えることにある。」(Lyon, 2001=2002, p.93)

### (2) 防犯空間

CPTED(Crime Prevention through environmental Design)とは「人間によってつくられる環境の適切なデザインと効果的な使用によって、犯罪に対する不安感と犯罪の発生の減少、そして生活の質の向上を導くことができる」(Crowe, 1991=1994, p.1) という考えに基づいた犯罪政策・都市政策であり、アメリカの建築家「オスカー・ニューマン」のアイデアにより、1970年代に提起された「防犯空間」の発想を受け継いだものである。それは「街路、道路などの分割による領域性の獲得にとどまらず、照明、温度などにいかに人が影響されるかの報告にあふれている。」(酒井, 2001, pp.113-114)

一例を見てみよう。長くなるが着目すべき記述があるので、ここに引用する。

不適切なデザイン例(図1)。A.学校、オフィスビル、モール、アパートなどの通路や角は、これらの空間を占領し、対立を引き起こす不当な利用者のグループにとって魅力的な場所である。B.正当な利用者がこのような場所を避けるため、危険な所であるという印象を強める。C.これらの空間を正当な利用者が利用せずに他へ行くため、他の場所で混雑が起こる。D.正当な利用者がこれらの場所を避けるため、不当な利用者の自分たちにとっての安全性と領域性を強める結果となる。

適切なデザイン例(図2)。A.安全な活動は、不適切に使用されている場所で行なうことによって、これらの場所での安全でない活動に取って代るものとなる。B.安全な活動は、これらのエリアに正当な利用者を引きつける。C.安全な活動と正当な利用者の行動は、不当な利用者が感じる危険性を作り出し、増大させる。D.ほとんどの場合、空間の使用と生産性があがる。(Crowe, 1991=1994, pp.174-176)

注釈を加えよう。図1において廊下のコーナースペースは、「対立を引き起こす不当な利用者グループ」が占領していることが図示されている。一方、図2においてそのスペースには、丸テーブルのようなものが置かれ、そこで何人かの「正当な利用者が安全」にそのスペースを使用していることが図示されている。

つまりこの引用からは、第一に、空間の構造やデザインの改変は人々の行動に影響を与えるということ、第二に、ある空間の様態はその周囲の空間の様態にも伝播するという、第三に、それらの点をふまえた上で、空間から不安因子を排除することによって、その空間の周辺でもまた不安因子は減少するといった、行動科学的な視点からの具体的対策案(領域性概念)、第四にそれは生産性を高め、そのような空間こそが「正当な」ものであるという価値判断が読み取れる。

しかし、そもそも「正当な」利用者と「不当な」とは一体誰のことだろうか。その違いはどのようなものであり、誰がそれを判断できるというのか。クロウによれば、正当な利用者とは「ある空間における存在が好ましい人間」であり、不当な利用者とは「その空間における存在が好ましくない人間」(Crowe, 1991=1994, p.59)であるとされる。しかし、これでは説明になっていない。

もう少しクロウの言葉を追っていこう。すると、次の言葉からは、「不当な利用者」がどのような人々であるのかがもう少し具体的に推察されるであろう。「午後、学校が終わると、ショッピングセンターに入ってくる3、4人の男の子たちは正当な利用者である。しかし、同じ男の子がモールが閉まろうとしている夜の9時半に、学校用の服を脱ぎ、変わった格好をして髪の毛をオレンジに染めた姿で現われたとしたら、正当な利用者だとは言いがたいであろう。」(Crowe, 1991=1994, p.59) この文から想起されるのは、不当な人物が、犯罪や暴力と結びついた、つまり「不良」的な存在としてとらえられているということである。しかしそれはその外見上のある特徴を持っているだけで、彼らが「不当な利用者」であると判定づける決定的理由はどこにもない。

しかし、「ゼロ・トレランス(寛大な処置は一切とらない)」政策において、「不当な利用者」とは、あらゆる「無用な者」とされるということである。それは、経済的貧困以外での逸脱者をも含んだ、広範な「アンダークラス」をも含む。(酒井, 2001, p.286)

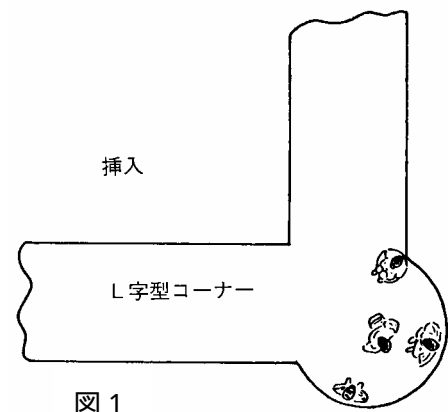


図1

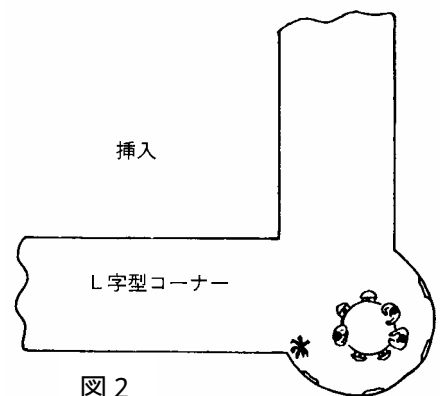


図2

### (3) リスク回避と言論の消失

先にあげた地下鉄セキュリティー・システム「クロマティカ」において「不審者」として検出された者のなかには、「ホームレスその他、日中をベンチで過ごす人々」(Mazoyer, 2001)がいた。また、衛生通信を利用した位置特定システムで警察がデモのリーダーの居場所をつきとめ、活動を制限しようとしたとの報告もある(Mazoyer, 2001)。ライアンは指摘する。「リスクの分類法自体にも、当然、疑念の余地が残る。『異常』な行動、『悪い』行動というのは一義的なカテゴリーではない。」(Lyon, 2001=2002, p.105)そしてこの立場は、犯罪対策の視点からみるとより顕著になる。犯罪対策において重要なのは、もはや原因追及ではなく、症候へのアプローチであり、事前にリスクを管理し、犯罪の発生可能性を除去するということである。それは内包社会から排除社会への転換を意味するであろう。リスクなものも予め排除され、その事前排除という予防は、道徳性や正義といった基準から切り離された、分類メカニズム的なものとなる。

監視という社会的オーケストレーション様式は〔…〕純粋に功利主義的な規範にしたがって作動するので、正義という言葉を経回して進んでしまうのである。〔…〕官僚制と同じように、個人的責任・感情・情動・道徳判断は排除される。けれども、その自己言及的な特性にもかかわらず、それは実に効率的に機能する。」(Lyon, 2001=2002, p.117)

このような状況下において、アレントが言う、言葉(言論)と行為(活動)によって成り立ちうる、あらゆる人々の共通の世界としての、人間の網の目、公的領域の存立は極めて難しくなりつつあるだろう。空間の隔離化の現象はさらにそれに追い打ちをかける。ロサンゼルスにおいてリスクを回避するため行われた、大規模な地域の囲い込みという構造的変化(ゲートッド・コミュニティ)は、日本では未だ見られないし、日本の大都市においては、その土地利用の混交性の故に、同様の事態が引き起こされるとは考えにくい。けれども、消費向けの単一的価値しか持たない大規模な商業施設が再開発の過程のなかで次々と建設される現象は、局所的にはあれそれと類似した空間様態を成立させる。そこに見受けられる、見通しのよい、人のたまりにくい、無用な立ち止まりや居座りを防止するような建築物デザインは、監視テクノロジーの十全な配備と一体となった形で、ある種の人々を暗黙のうちに排除するような構造を有している。

## 第五章 生を条件づける都市空間

### (1) アレント - 現象学的地理学 - 都市工学と監視社会

この章では、前章までに取り上げた三つの理論的手がかり 現象学的地理学、アレント『人間の条件』、都市工学と監視社会 を関係づけながら、都市空間が、生をどのように条件付けているのかについての考察を行っていく。そもそもこの論文において、生を「条件付けられた」存在としてとらえようとしたきっかけは、アレントの『人間の条件』であった。アレントは、人間存在の条件として「生命それ自体、出生と可死性、世界性、多数性、地球」(Arendt, 1958=1994, p.24) といった事柄をあげているが、その各々は、活動 仕事 労働 の三つの活動力との対応関係にある。すなわち、人間は、「地球」すなわち自然物によって条件付けられているばかりでなく、活動 の条件である「多数性」、仕事 の条件である「世界性」、労働 の条件である「生命それ自体」によっても条件付けられている存在なのである。物を介さない関係性としての活動 が、しかし耐久性のある「物」の客観性を前提として可能になるということからも考えられるように、人間存在は、単に物質的な「物」により条件づけられたものであるということもできないし、一方、人間が自分自身で作り出す 人間関係的なものにより作りだされる 条件のみにより、条件付けられているということもできない。人間は、物質的な物のみならず、人間が自分自身で作り出した条件によっても条件付けられる存在であり、その両者の条件づけは密接に関係している。

ところでアレントのこの思考を直接、現代の都市の現象的事柄を考えるときの理論的立脚点とすることには無理があるだろう。「社会的なものの領域」や「私的領域 / 公的領域」といった領域は、たしかに地球という地理的空間のうえに位置を占め、その大地に生きた人間や、人間により構成された人間社会を思考の前提にはいるであろうが、その領域概念は必ずしも地理的空間性に裏打ちされているわけではない。それは多分に歴史的であり、地理的空間性を超越したものでもあろうから、地理的に位置を占め、建築物や構築物といった物質的な物の存在なしではとらえきれない都市空間と、同等・同質のものと言うことはできないであろう。アレントにおける 社会的なものの領域、公的 / 私的領域 と、時間-空間の関係については、ここでは扱いきれないが、より詳細に論じる必要がある。

けれども、公的領域 / 私的領域についてのアレントの記述のなかで、古代ギリシアの都市国家の例がたびたび参照項とされていることからわかるように、少なくとも歴史的に存在した人間社会にその思考が裏打ちされている以上、アレントの思考を現代の都市を考える際の思想的背景に位置づけることは、一定の妥当性を有していると言えるだろう。アレントの思考は、都市や、都市に生きる人間を、自然過程というダイナミックな循環のなかに位置づけ、物 と 人間、人工的な物 と 自然物 といった、著しく異なった性質をもつように思われるものの関係性を問い直す契機を与えてくれるかもしれないし、活動 というきわめて人間的な活動力が、歴史の条件となっているといった記述からも読み取れるように、それは人間社会についての長期的な時間軸の視点をもたらししてくれるかもしれない。

一方、物と人間の生命に関するアレントの思考を現代の都市社会を考える文脈に導入することは、一見無理があるように見えるかもしれない。しかし、都市もまた自然の循環過程のなかに構築されたものであるし、そのたくさんの建築物-構築物を取り除いたところに広がるのは原野である。建築物自体もまた、日々老朽化という自然過程のなかにあるし、都市の変化を考える際に、その生成と消滅という問題を考えることは避けられないであろう。以上のような理由から、アレントの思考を都市社会を考える際の手がかりとすることは、都市工学的あるいは建築的視点だけに偏った都市分析とも異なるし、社会学的な人間関係の視点だけに偏ることもないから、その両者の関係性を見るためのパースペクティブを提示してくれるかもしれない。

しかし、いずれにしても、アレントの思考だけで、現代都市の現象を考察していこうとすることには無理がある。そこで、より現代的、実際的な視点から都市の空間や場所について考えるための手がかりとして、現象学的地理学を参照した。それは、空間と場所の関係性や実際的な場所の様態についての考察、都市計画と空間認識カテゴリーの関係性などを明らかにしてくれる。しかしその思考を、アレントの思考とのかかわりのなかで位置づけるならば、それはアレントの視点から見えてくる、現代都市の労働＝消費化とは別の、消費化現象のもうひとつの側面を説明しようとするときの理論的立脚点としてであろう。もうすこし説明を加えよう。近代に入り、仕事や活動の過程化がおこり、それらが労働の様式で行われるようになったというアレントの指摘は、第三章においても触れたとおりであるが、労働＝消費化を現代の都市を考えるためのキーワードとしてとらえようとする場合、それには二つの意味が含まれるであろう。それは第一に、建築物といった本来耐久性のある物が、労働＝消費的なものになっているということ、つまり「建築物の消費化」であり、第二に、都市空間における消費施設の増大や、公共空間の消費施設化といった、「都市空間の消費空間化」である。アレントの思考は第一の視点にかかわり、現象学的地理学の思考は第二の視点にかかわる。

## (2) 消費的空間の問題

前節で記したように、都市空間の労働＝消費化には二つの側面がある。それは第一に、物をつくる 仕事の活動力の過程化(労働化)によって引き起こされる、「建築物自体の消費化」(...i)であり、それは第二に、都市空間における消費施設の増大や再開発による消費施設化に見られるような、「都市空間の消費空間化」(...ii)である。

i) 「建築物自体の消費化」が持つ問題性は次の点にある。すなわちその状況において、耐久性のある「物」の世界は自然過程的な腐敗化によってその存立をゆるがされているから、活動の不可能化を引き起こしうる。消費化は、人々の活動を可能たらしめる、安定的な物の世界を構築する仕事の活動力を、労働化させてしまうという点で活動の不可能性の一つの原因となり、安定的な物の存在によって裏打ちされる客観性は失われるから、人間のリアリティの感覚もまた消失をまぬがれない。都市空間の消費化は、消費が人間の活動力のなかで重要な位置を占めるに至ったことの証拠でもあるが、その状態において、消費がそもそも「生命の必要」に根ざした労働的な活動力であったことは忘れ去られる。とどまることを知らぬ循環運動に乗せられたまま、「消費対象物を大量にむさぼり食う」状態が続くと、人々が「生命の空虚さ」を気づくことが不可能となるが、アレントが消費化の危険として記したことはこのことであった。

ii) 「都市空間の消費空間化」の問題性は次の点にある。現象学的地理学の見地から見た場合、消費の空間は私たちにとって魅力と自由を与えるものであるが、それらの空間のもたらす景観は、偽りの場所性しか持たない、平板な景観「フラットスケープ」を作り出しているにすぎない。消費的空間は大量消費のためにし向けられた各種の装置によって成り立っているが、それは人々から場所性の感覚を奪い、また都市における「親密な」経験をもたらす場所をも食い尽くす勢いで、没場所性の影響を増加させつつある。そしてそれは場所性の喪失を引き起こしかねない。

i) および ii) は共に、物を朽ち果てゆく消費物にし、また、第二章でみたように人々に「物」からの乖離を引き起こす。認知科学の分野では、人間の記憶のすべてが脳にまとまっているわけではなく、環境内の事物が記憶の外部装置として働いているという指摘がなされているが(大野・中安・添田, 2002, p.173)、それ故にも、物の消失や物からの乖離は、人間の記憶をあやうい淵へと追いやるのである。

一方で消費的空間は、監視-排除と一体となった形で、現代の都市空間に登場しているという指摘を行った



のは、ライオンであった。都市工学と監視化が、アレントの思考や現象学的地理学とのかかわりのなかで、とりわけ本論文中でどのような位置づけにあるのかを記せば、それはまずは、アレントの思考や現象学的地理学ではとらえきれない現代的な現象をとらえるための視点を獲得するためであった。だが、それだけではない。アレント、現象学的地理学、都市工学・監視化という三つが言及している事柄のなかに、次の二つの共通項を見出すことができよう。それは第一に、統計学への言及である。都市工学・監視化においては、数量的、兆候予測的、リスクマネジメント的な、つまり統計学的な視点から人間の行動をとらえようとしているが、アレントにおいてそれは歴史の否定と消失の前提になるものとして批判されているし、一方、現象学的地理学においては、生きられた空間の希求という考えに基づいた形で、抽象的な空間認知の帰結である熟慮の空間都市計画的空間への批判という形で記されている。第二にそれは、「物」への言及である。アレントは「物」の消費物化の危険を、現象学的地理学は場所や物からの乖離の問題性を指摘しているが、一方、都市工学・監視化のなかでは、物への愛着性や根ざすことの意味などは、その数量的思考によって失われている。

これらの共通点から考えられる、この三つのものの関係性は次のようなものであろう。つまり、監視化は、第一に、労働-消費の活動力そのものに起因するものであるし、第二に、消費空間化した都市空間の故に、第三に、消費空間化した場所性の喪失と、消費施設自体のもつ一つの目的である、わかりやすさと明るさの達成、盗難対策といったものと密接に関わりを持っている。監視化は、それらの前提条件が、十分に発達した科学技術や統計学的な思考と結びついたときに達成される。そしてそれらの前提条件とその結合が相乗的に関係し合って引き起こされるのが、活動の不可能化であろう。

統計学的思考において、人々のなかで異質で、若干なりとも逸脱したものと見られるたぐいの行動は、偏差もしくは逸脱として、つまり単なる数値データのなものとして扱われる一方、その行動の逸脱性は、犯罪発生の除去と同列のものとしてメカニカルに対処され、排除される。そこにおいて、奇蹟や卓説性とも密接に関わり合った活動は不可能な布置へと貶められる。

人々の共通世界の感覚は、消費化、監視化の過程の中で消失する。また、原因ではなく症候の分析が追求される犯罪対策において見られるように、正当と不正、正義といったすぐれて「言論」的な概念は切断されてしまう。そこにおいて言論や活動によって成り立つ、共通世界（公的領域）の存立は極めて難しくなる。立ち止まるべきでないと言われた所に立ち止まったホームレスと同様、政治的活動を行おうとする者すらも、そのような科学技術的な監視-排除のメカニズムによってその活動を制限される。それがいかに新たなはじまりをもたらす活動であったとしても、不確実性と不可予言性を予感させるような活動は、取り締まりの対象となってしまうのだ。

さらに、出来事と結びついた場所が人々にある共通の記憶を存続させ、記憶をよみがえらせるという「場所」特有の強みも、再開発と没場所化の過程のなかで抹消されるから、人々は根ざす場所も、辿るべき記憶も失いかけている。人々は、忘却に抗おうとしなければ、ただひたすらに忘却へと追い込まれるだけというような、状態に立たされている。

### (3) グラフィティの意味

そのような中において、グラフィティがもつ意味はどんなものだろうか。アレントの考えでは、人々が言葉（言論）と行為（活動）によって成り立つ活動の領域に加わるためには、まず自らが誰であるかを明らかにし、人々の前に姿を現わすことが前提条件となる。だから正体を明かさずに行った活動は「無意味」(Arendt, 1958=1994, p.294)である。

人が行為と言葉において自分自身を暴露するとき、その人はどんな正体を明らかにしているのか自分でもわからないけれども、ともかく暴露の危険を自ら進んで犯していることはまちがいない。なぜなら、善行の人は自己自身を無にし、完全に匿名でいなければならないからである。また、〔それは〕自分自身を他人から隠さなければならぬ犯罪者にもできないことである。( Ardent, 1958=1994, p.292 )

グラフィティ・ライターは犯罪者であるから、ライターの描くグラフィティは、あくまでも非-活動的なものということになる。

アレントは、公的領域を「明るみ」という言葉で表現するように、公的領域に立ち現れることを、舞台という明るみに立つ役者ともとれるような記述で表現しているが、そこにおいて見いだせる「明るさ」は、冒頭の『明るさの修辞学』で見られたような、都市計画における「明るさ」への志向とは質的にちがう。

アレントにおける公的領域の、現れの空間としての「明るさ」は、ある不安定性や不確定性を孕んだ言論や活動に対する賞賛や注目という意味での、「スポットライト的」な光であろう。それは自ら名乗り出ること、自ら正体を暴露することによってはじめて当てられる光だ。それは自らの主体性のもとに、暗闇から出た瞬間に現われる光なのである。

対して都市空間とりわけ再開発において見られる「明るさ」は、監視の視線と結合した明るさなのだ。それは人々が「現れる」ことをあらかじめ排除するように、都市空間のなかの暗部をもやみくもに照らし出す、均質的で一様化した照明装置による光である。それはあらかじめ空間を押しつけがましく明るく保とうとすることによって、「活動」的な現われの空間の輝きや明るさを、抹消させるような作用を持つものなのではないだろうか。

グラフィティ・ライターは自身の姿を現わしはしない。その意味で孤独な人ではあるが、すでに明るみをとまって立ち現れることが不可能となった、つまり「活動」の明るみが不可能となった都市空間において、浮ついた再開発的「明るさ」への違和感を提出するために、癡的な、かつ半-言語的で半-記名的な痕跡を壁に残すことによって、なんとか保険数理的なリスクマネジメントへの逆行を志向し、より現実的な形で、自らが「誰」であるのかという姿を顕わそうとしているのだろう。アレントは決してそれを「活動」であるとは認めないかもしれないが。

しかし数的な管理性と情報社会のフローの中で、発せられる言葉（言論）も行われる行為（活動）も、ほとんど注目されぬまま、いわばスポットライトを浴びないまま、消失させられていってしまうよう現代の都市空間において、自らの存在を明らかにした形での「活動」が正当に受け入れられないであろうことを考慮すると、それはひとつの苦肉の策であることが理解できる。

#### (4) 影への志向

年月の経過、風雪にさらされるなかで、建築物は確実に古さを増していく。老朽化した建築物を維持し、改修し、改築することは不可欠なことだ。しかし、自然の過程がとどまることがないのと同様に、それらを維持するための労働の活動力に裏打ちされた私たちの社会の経済的繁栄が可能であり続けるとは限らないという危機感を持っておく必要がある。とりわけ経済的低成長と人口減少を前にした私たちの社会において、それは顕著な兆候となって現れるであろう。「明るさ」と魅力とを兼ね備えた消費的施設の維持は次第に困窮を極め、公共建築物・構築物もまた、年月の経過とともに古さを増し、それらを維持することすらおぼつかなくなっていくかもしれない。

そのとき人々は、再び場所に根をおろし、生きられた 身体による 生きられた 空間の経験への回帰を切望するのではないだろうか。密集は親密さを呼び起こし、影（暗さ）は、うわついていない「明るさ」を可能たらしめる前提条件となるだろう。影（暗さ）は、建物や構築物の端や陰にできるものだ。人々は端や陰に集まり、そのような暗闇のなかで培われた発話前の「言葉」や行為される前の「行為」の予兆が、共通世界としての公的領域の明るみに出てくるのであったらう。

ところが現代において未-低利用のスペースは、商業スペースへと転化し、フラットにつくりかえられた公的空間からは、影や暗闇は消失してしまっている。それは、潜在的に人間に必要なある特定の場所性すなわち影、暗さといったものを、構造的に消失させてしまっている。

人が生きるための空間は、それほどまでに整然とされている必要はない。いろいろなものが曖昧で、境界線が不明確という大らかさの状態からは、清潔に整頓された状態への回帰という欲求よりも、むしろ、壊されていく都市への許容性のようなものを感じる。それは妙な安心感を私たちに与えてくれさえる。

東京の再開発地域ほどに清潔で、敷地と敷地、境界と境界の間が明確に定まり、そしてそれぞれの空間の所有者、占有者が、その空間を管理する責務を負うというような仕組みは、人間の生にとって必須のものではない。ほどよい乱雑性への回帰、不可予言性への移行をもたらそうとする現象の一つとして、グラフィティは清潔な都市空間に、ある種の真実をつきつけているのではないだろうか。

#### （５）他者性の恐怖と都市の魅力

監視化や都市空間におけるリスクマネジメントの動きは、そもそも、都市という「流動性が高く、見知らぬ者たち同士が遭遇し合う」（Lyon, 2001=2002, p.116）環境のなかで、人々の対立や抗争をいかに亡くしていくかといったことを念頭においてすすめられてきた動きであった。都市は、「刺激や興奮の場、習慣・スタイル・考え方・活動が交雑する場である。だが、それは潜在的な危険の場でもある。自分と異なる他者に出会うことは、〔…〕「他者性」という驚異に晒されて不安が呼び覚まされる状況でもありうる。」（Lyon, 2001=2002, p.116）とりわけそれは、全く異なった人種、経済的状況、バックグラウンドを持った人々が混交する都市において、早くから問題化されてきた。それは、深刻化する犯罪や破壊行為、経済危機といった事態との絡み合いのなかで、生まれざるを得なかった事態だったのかもしれない。

そう考えたとき、日本の大都市は高度成長期以降、犯罪発生や破壊行為、深刻な経済危機といった状況に迫られたことが アメリカの大都市などに比べれば 少なかったと言えるであろう。それでも 1960-1970 年代の学生闘争は、他者性の魅力と危険に満たされた時期であったと言えるかもしれない。一方 1980 年代というポストモダン期において、そうした対立が表面化する事態は衰退し、一方で「新しさのモード」（若林・内田, 1997, p.60）を語ろうとするポストモダンの都市論が、文化＝消費的雰囲気のみならずはやされていった。現在の都市再開発は、その軌道を微妙に修正しながらも、1980 年代以降の「文化＝消費的空間生成」のラインを未だ開拓しつつある。

しかし現代の「都市再生」政策にかいま見られるように、最後の力を振り絞るかのような都市再開発は、その後に来る持続の不可能性を露呈しているのではないかという不安が、覆い隠そうとしても隠しきれないものとして顕わになりつつあるように思えてならない。そのような不安感のなかで、「暗さ」への志向は成立していると思われる。

「他者性」の恐怖は常に私たちにつきまとう。それは一見、予め取り除かれ解消されていけば心地よいとの認識をも生みそうになってしまう。しかし、そのような排除への肯定が、誰しもが持つ何かを始める可能性を排除してしまうかもしれないという危機感は、持つ必要がある。

自然の観点から見ると、生から死まで人間の寿命が描く直線運動は、循環運動という一般的な自然法則からの特殊な逸脱であるかのように見える。これと同じように、活動は、世界の進路を決定しているように思われる自動的過程から眺めると、一つの奇蹟のように見える。( Ardent, 1958=1994, p.385 )

なるほど、人間は死ななければならない。しかし、人間が生まれてきたのは死ぬためではなくて、始めるためである。活動は常にこのようなことを思い起こさせる。( Ardent, 1958=1994, p.385 )

現在私たちが行った決定、非決定は現在ここに生きる人々だけではなく、これからここで生きることになるであろう人々へも影響をもたらす。だとすればその多分に社会的な決定を、人間による言論や活動によらず、統計学的保険数理的な計量主義や、リスクマネジメント的、自動判断的な、言語のよらないものに頼り、安易に解決を図ろうとしていく事態に、安易に同意することはできない。

「他者性」の恐怖と「言論の消失」という二重の恐怖感の中で、私たちはどのように、生を条件付け、それと不可分な関係にある都市空間の雰囲気や物理的建築物・構築物の改変を注視していけばよいのだろうか。それは単純なデザインや機能主義批判に還元しつくされることなく、一方で、単純にそのような兆候があるということへの黙認でもないであろう。そこには、思想的な価値判断、倫理的な態度が密接に関係しているのである。

## おわりに

この論文を書くにあたってきっかけとなったのは、次の二つの感情と体験であった。一つ目は、ここ数年非常に目につくようになった、グラフィティへの違和感であった。街中、とりわけ線路沿いの壁面などになされた落書きは、スプレー塗料特有の光沢感と点描性、色彩、デザインの面で、決して心地よい印象を与えてはくれなかった。その解読不能なアルファベット文字、とりわけニューヨークの地下鉄において見られた落書きとの類似性は、周囲の環境に調和していないように思え、落書きを受けた壁や建築物の所有者がそれを修繕するために、修繕のコストを負担しなければならないことには、他人事ながらふがいないものを感じていた。そしてこの感情は、現在でも、若干残っている。

しかし私たちと同世代の人々が、スプレー缶を片手に、様々な危険を犯しつつも夜の街を駆けめぐる姿を想像したとき、単にそれを、憎むべき不要なものとしてレッテル化しただけでは、なにも考えていないだけにすぎないと思うに至った。

そのように考えが変化した背景には、2001年8月の、早稲田大学における既存部室の閉鎖と新学生会館(新部室)への移転に関する問題への若干のかかわりが、関係しているかもしれない。これが、感情と体験の二つ目である。混沌と不分明性を纏った、影の空間として旧部室は、ある種の文化を醸成する空間であった。その空間の封鎖と、高度なセキュリティシステムを持つ新学生会館への移転は、十分な言論的協議と合意によってなされたものとは言い難かった。新部室への移転がもたらしたものの、それはいかにも再開発の帰結としての「明るさ」であった。そこにおいて「暗さ」は、過去との断絶とともに消滅した。

都市における清潔性と混沌性という相反するものの関係性への興味は、そこから生まれたように思える。都市の「明るさ」のなかに、突発的かつ挑発的に「暗さ」をもたらすグラフィティは、その突発性のゆえに、周囲との環境の不調和を引き起こすように考えられたが、それを掘り下げていくと、「明るい」空間と「暗い」空間が、それぞれにもつ「明るさ」と「暗さ」という特徴は、混交を許されないものでなければいけないというような、一種の脅迫観念のようなものが働いているのではないかという考えが浮かんだ。つまり、こういうことである。「明るさ」は、「明るい」空間において許容されるし、またある程度は「暗い」空間においても許容されるものであるが、一方「暗さ」は、「暗い」空間においてしか許容されないのではないか、ということである。

すると、「明るさ」への志向性を帯びた空間と、「暗さ」への志向性を帯びた空間というものが、どのように相違点/共通点を持ち、どのように分離されているのか/いないのか、そしてそこにはどのような力学が働いているのか、といったことへの関心が湧いてきた。それはまた、一種の暗さを持つ文化的なものが、資本主義的明るみのなかで消されていってしまうのではないかという危機感とも関係している。そのような考えのもと、アレントや現象学的地理学、都市工学と監視社会などについての文献に触れながら、最低限、その力学の一側面を、若干なりとも言及しようと試みたのが、本論文である。

それ故、個別具体的なテーマを扱い、客観的、論理的思考を基調とする研究に比べ、この論文は主観的要素や批評的要素が強いのではないかという指摘は、免れ得ないかもしれない。たしかに、より実際的に都市空間を観察の対象として位置づけ、現実の様態がどのようなものであるのかについて、詳細に探っていくことは必要である。しかし、思想的なものを欠いたところで、客観的に個別具体的な対象物についての研究を試みようとするだけでは、その研究は「生きられた人間から遊離したものになるように思えるし、客観性とは別の意味でリアリティを欠いたものになりかねない。そのような考えから、この時点で一度、都市空間を観察していくための視点を確認しておく作業をしておきたいと思った。それが、この論文を執筆しようとした動機である。

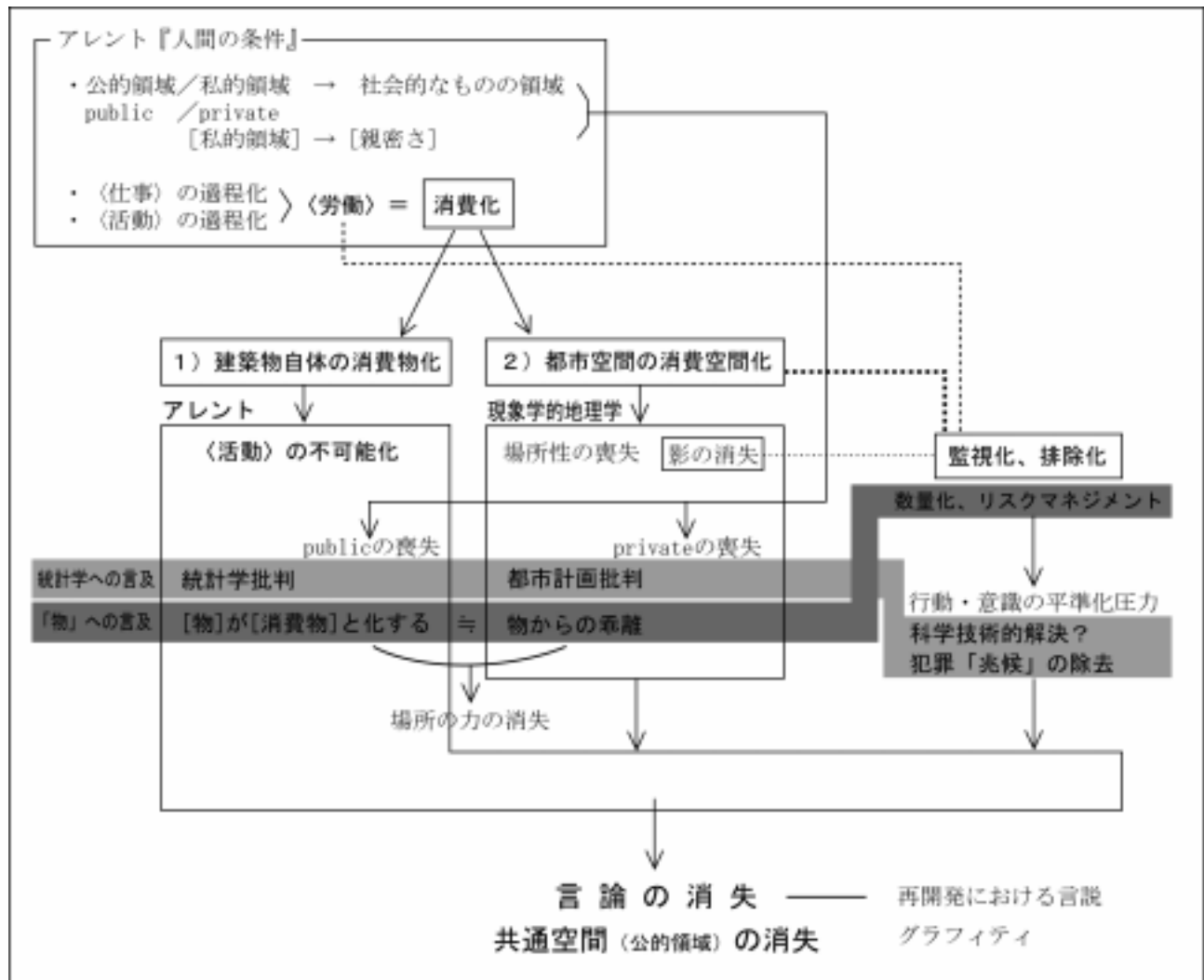
これは、着想段階の記述になるが、この現象の背景には、地域社会の崩壊と世代間対立といったものがあるのではないだろうか。「地域社会の愛」的な人間関係のなかで成長することにも乏しく、文化や言論の捨象された世界の中で生まれ育ってきた人々（世代）の、ある種の「根付きのなさ」が、あるいは、成長したときにはすでに造るべきものもなく、もはや壊すくらいしかやりようがないと感じる人々（世代）の、暗黙のメッセージ、言語化できない焦燥感、突発的な形でしか欲望を発散できない感情のようなものが、一面的には、グラフィティという形で表されているのかもしれない。

しかし日本のグラフィティへの違和感もある。それは文化的土着性をもった刻印というよりは、単に流行的に、欧米におけるグラフィティを真似しただけという感じは否めない。しかもそれが、果たしてどれだけの社会的・政治的意味を有しているのかということは問うべき課題である。

人口の減少、経済の衰退、都市規模の縮小といったものの予兆のなかで、やみくもな経済的再開発がつけられた場合、将来、よりいっそう悲劇的な事態になるのではないかという恐怖がある。根付くことは、ある種、その場所に自分自身や共同体の愛着を刻印することと不可分であろう。しかし、根付くことを許されず、パーソナライズすることを許さない管理的公共空間の増加や資本投下的再開発の流れの中で、まっさきに開発や管理化の対象となるのは、通常地域社会ではない独特のコミュニティを形成している文化的暗部ではないだろうか。そしてその空間は、混沌性を纏いながらも何らかの強烈なエネルギーの発信源であったように思える。しかしそのようなものの破壊が成された後に、文化は、いかにして可能となるのだろうか？

監視カメラの配備が、ただちにある種の人々を排除するといったことはないかもしれない。しかし、それは潜在的に監視と排除の形態を用意する。それと同様に、都市空間という、人々が実際に生まれ、生き、生きた、社会的空間において発生する様々な現象や構造の変化の微細な兆候に着目していくこと、人々を条件づけるものとしてそれらの現象や構造の潜在的特徴に着目していくことは、非常に重要なテーマである。それは生きることと密接にかかわるものであり、それは私たちの生を問うことである。

付図



## 註

- (1) 「『負の連鎖』巡回の死角、管理者も戸惑い 川崎・多摩区登戸陸橋地下通路」, 毎日新聞, 都内版, 2003.8.21 朝刊.
- (2) 「読者からの意見続々」, 毎日, 都内版, 2003.7.23 朝刊.
- (3) 「落書きと戦う現場ルポ 広がる『すぐ消す』活動」, 毎日新聞, 都内版, 2003.10.4 朝刊.
- (4) 「夏の歓楽地で(1) 渋谷編 / 上」, 毎日新聞, 都内版, 2003.8.14 朝刊.
- (5) 「落書き犯人『1万回』の告白 / 上」, 毎日新聞, 都内版, 2003.10.9 朝刊.
- (6) 「昨年1年間で157件の被害届『撲滅』への対策は... 末綱隆・県警本部長に聞く」, <http://kanagawa21.jp/news/rakugaki/15.html>.
- (7) 「放置の店周辺に増殖した世田谷・下北沢 すぐ消すが効果」, 毎日新聞, 都内版, 2003.6.24 朝刊.
- (8) 「逆転の発想 渋谷・代官山地区」, 毎日新聞, 都内版, 2003.6.26, 朝刊
- (9) 「根比べに負けないことが大切」 商店街、企業と連携する神奈川の「平塚をみがく会」, 毎日新聞, 都内版, 2003.6.25 朝刊.
- (10) 「中学生とホームレス、共作 落書きトンネル、絵でよみがえる 川崎・渡田中」, 毎日新聞, 都内版, 2003.8.9 夕刊.
- (11) 「地元が知らない『地元案』」, 「住民と都市再生」を考えるページ, <http://www.cminc.ne.jp/pub/main03.htm>.
- (12) 「住民と都市再生」を考えるページ, <http://www.cminc.ne.jp/pub/main03.htm>, 2003.2.
- (13) SPUTNIK, <http://www.sputnik.ac/interview%20page/mingle.html>.



## 参考文献

- Arden, H. 1958 *The Human Condition*, University of Chicago Press. (= 1994, 志水速雄『人間の条件』筑摩書房)
- Crowe, T.D. 1991 *Crime Prevention Through Environmental Design*, National Crime Prevention Institute. (= 1994, 猪狩達夫・高杉文子訳『環境設計による犯罪予防』都市防犯研究センター)
- Hayden, D. 1995 *The Power of Place: Urban Landscapes as Public History*. (= 2002, 後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎訳『場所の力』学芸出版社)
- Krolak, K. 2001 (= 辺見浩久訳「『プロGRESSIV・アナーキー』と『応答としての建築』とのはざままで」), 篠原一男編, 2001, 『篠原一男経由 東京発東京論』鹿島出版会, 所収.
- Lyon, D. 2001 *Surveillance Society: Monitoring everyday life*, Open University Press. (= 2002, 河村一郎訳『監視社会』青土社)
- Mazoyer, F. 2001 “Surveiller est aussi un marché,” *Le Monde Diplomatique*, 2001.8. (= 2001, 渡部由紀子訳「プライバシーのことなら我々におまかせ」<http://www.diplo.jp/articles01/0108-4.html>)
- Relph, E. 1976 *Place And Placelessness*, Pion Limited. (= 1999, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学』筑摩書房)
- Tuan, Yi-Fu. 1977 *Space and Place*, University of Minnesota. (= 1993, 山本浩訳『空間の経験』筑摩書房)
- Walsh, M. 1996 “*Graffio*” (= 2003 新田啓子訳「グラフィティをめぐる断章」, 『現代思想』, 青土社, 31(12): pp.44-61.)
- 五十嵐敬喜・小川明雄著, 2003, 「『都市再生』を問う」, 岩波書店.
- 五十嵐太郎, 1998, 「他者が欲望する黒船都市、トーキョー」, 『10+1』INAX 出版, No.12: pp.80-90.
- 大方潤一郎, 2002, 「都市再生と都市計画」, 『都市問題』93(3): pp.17-36.
- 大野隆造・中安美生・添田昌志, 2002, 「移動時の自己運動感覚による場所の記憶に関する研究」, 『日本建築学会計画系論文集』, 560:pp.173-178.
- 警察庁, 2002 『平成 14 年 警察白書』.
- 高祖岩三郎, 2003, 「『その名』を公共圏に記しつづけよ!」, 『現代思想』, 青土社, 31(12): pp.62-79.
- 国土交通省総合政策局情報管理部建設調査統計課, 2003, 『平成 15 年度建設投資見通し 概要とその要点』.
- 斉藤純一, 2000, 『公共性』, 岩波書店.
- 酒井隆史, 2001, 『自由論 現在性の系譜学』青土社.
- 酒井隆史, 2002, 「タギングの奇蹟」, 『現代思想』, 青土社, 30(6): pp.52-71.
- 高野岳彦, 1991, 「訳者あとがき 人間主義的地理学とエドワード・レルフ」, Relph, E. 『場所の現象学』筑摩書房, 所収.
- 平井太郎, 2002, 「明るさの修辞学」, 『相関社会科学』12: pp.52-68.
- 矢作弘, 2002, 「ランドデザインなき『都市再生』」, 『都市問題』93(3): pp.3-15.
- 若林幹夫・内田隆三, 1997, 「東京あるいは都市の地層を測量する」, 『10+1』INAX 出版, No.12: pp.62-79.